

表-6 造形あそびについて

表-6	身の回りにアドバイスを受ける教員がいる	身の回りにアドバイスを受ける教員がいない
造形あそびをしている	77人 (42%) ㊦	118人 (68%) ㊧
造形あそびをしていない	61人 (39%) ㊨	97人 (61%) ㊩

表-7 教科書の工夫と造形あそび

表-7	造形あそびをしている	造形あそびをしていない
工夫	101 (63%)	57 (37%)
教科書どおり	102 (50%)	100 (50%)

表-8 指導の自信と造形あそび

表-8 ①	造形あそびをしている	造形あそびをしていない
指導に自信がある	51人 (65%) ㊦	27人 (35%) ㊧
指導に自信がない	142人 (54%) ㊨	122人 (46%) ㊩

表-8 ②	指導に自信がある	指導に自信がない
造形あそびをしている 193	51人 (26%) ㊦	142人 (73%) ㊧
造形あそびをしていない 147	27人 (18%) ㊨	122人 (82%) ㊩

表-9 担当学年、年代と造形あそび

表9 ①	造形あそびをしている 208人	造形あそびをしていない 162人
低学年担当	85人 (70%)	36人 (30%)
中学年担当	54人 (55%)	45人 (45%)
高学年担当	36人 (36%)	64人 (64%)
担外	33人 (70%)	14人 (30%)

表9 ②	造形あそびをしている 208人	造形あそびをしていない 162人
20代	26人 (53%)	23人 (47%)
30代	31人 (51%)	30人 (49%)
40代	52人 (49%)	54人 (51%)
50代	62人 (55%)	50人 (45%)

いと答えた教員の半数が「造形あそびをしていない」と答えている。次に、指導に対しての自信と造形あそびについての相関では、指導に自信がある教員の中での造形あそび実施率は、自信がない教員と比較して若干取り組み率が高いものの顕著な差とはなっていない。(表8-①)しかし、造形あそびを行っている教員の中での自信の割合を見てみると指導に自信がない教員の造形あそび実施率が7割と高い。(表8-②、㊦)また、造形あ

そびに取り組まない教員の、指導に自信がない割合も8割を超えている。(表8-②、㊩)

担当学年と実施率においては低学年では実施率が高く、高学年になるにしたがい実施率が低くなる。(表9-①)年代別では各年代ともそれほど差が生じていない。

さらにアンケートに記述された内容を見てみる。まず、造形あそびに取り組んでいない理由であるが次の3点に集約できる。ア. 時間的な余裕や活動のための場所がない等、物理的な条件を理由とするもの。(56件中30件)イ. 活動に意義を見いだせない、評価の仕方が分からないなど指導及び評価に関する理解不足及び指導力の不足を感じさせるもの。

(17件)ウ. その他(9件)その他の中には「年間指導計画に入っていないため」「低学年中心に重点を置いているため自校での高学年には入っていない」「高学年のため」など、学習指導要領に対する理解不足も見られる。また、造形あそびに取り組む理由を見てみると、教科書に掲載されているから」「年間指導計画に位置づけられているから」などの消極的な理由もあるが、「子どもが楽しそうに取り組むから」など、実際の造形あそびを通して教員が学習の魅力を実感している理由が多い。

#### ②造形あそびへの理解についての考察

造形あそびに取り組んでいない理由から推察できることは、造形あそびに対する理解が低い点が浮かび上がってくる。例えば物理的条件に取り組まない理由としてあげている中で、「大がかりな題材が多い」など、造形あそびに対してダイナミックな活動が造形あそびであるというようなイメージの偏りが見られる。机の上でできる造形あそびとか、または従来行っている題材の中にも造形あそび的なねらいを持った題材はある。そのような、造形あそびの意義や目的の理解不足から造形あそびの特徴を生かした授業がされていないことが考えられる。このことは、表7のデータからも推察でき、本来教科書通りに進めれ

ば必ず造形あそびが複数頁掲載されている<sup>6)</sup>。つまり、教科書の造形あそびの題材を造形あそびとして意識していないか、または「つくりたいものをつくる」との学習目標の違いを区別できていないことが予想できる。

指導要領で示された造形あそびのねらいは「一人一人の創造的な想像力や造形感覚、技能などの資質や能力を十分に働かせ、伸ばすようにすることをねらいとしている。」に対し、つくりたいものをつくる活動は「造形感覚や創造的な技能などを働かせ、よさや美しさなどを考えながら、表し方を工夫するなど創造的に表現する力を育てることをねらいとする」となっている。つまり、活動そのもののねらいが異なっており、そのねらいの把握なしでは充実した学びは保障できない。また、指導についての自信と造形あそびの関連では、表8-②の㉞を見ても、造形あそびをしていない教員の82%が指導に自信がないと答えており、表1の⑧Bの66.3%を大幅に上回っている。同様に造形遊びをしている教員も指導に自信が無いと答えている割合が73%と高い。ここで注目すべきは後者の造形あそびをしている教員の中で、自信がないと答える率の高さ(表4の㉞)である。このことは、小学校では教科書を中心に授業が展開されている実態から考えると、教科書に掲載されているので指導はしているが、指導については自信がないという教員の実態が見えてくる。アンケートで「造形あそびで何を育てるのかよくわからない」という記述が多いことから造形あそびのねらいの理解が低いのではないだろうか。

学年による実施状況からは低学年では比較的行われる造形あそびが学年が上がるに従い実施されなくなる傾向が強い。高学年になり時数が年間50時間に減少することも大きく影響していると考えられる。中には「年間指導計画に位置づけられていない」とか「高学年だから」など、学習指導要領と離れた指導計画の存在や、または、教員自身が年間指導計

画に位置づけられている造形あそびに気づいていない実態がある。いずれにせよ、学習指導要領が十分に理解され、造形あそびのねらいを十分に把握した授業実践がまだまだ不足している実態がある。(三澤一実)

#### (5) 保護者の期待

小学校に子どもを通わせる保護者3,000人を対象にアンケートを実施し、1,741人の回答を得た。その集計結果から図画工作科に対する保護者の期待を述べる。

①「図画工作の授業が必要か不要か」について、必要(あった方がよい)と答えた解答は98.1%と圧倒的に多い。その理由として「ものを作り出す喜びを学べる」(84%)「発想力や創造力を鍛え、創造的な力を身につけられる。」(75.7%)「子どもの頃はたくさんの教科を学びその中で自分の特性を探した方がよい」(58.5%)とある。「やりたい人だけが取り組む選択制でよい」と回答した人は、1.4%のみである。このことからほとんどの保護者が図画工作を必修教科として要望している。これはアンケートに協力していただいた保護者が図画工作について興味や関心を持っていることと図画工作に関してその学びの必要性を理解している結果といえよう。

反対に「図画工作は不必要(なくてもよい)」と答えた人はわずか1%であった。その理由として「すべての人が絵や彫刻など表現活動が好きではない。」「選択制にしてやりたい人だけ取り組めばいい」をあげているが、むしろ「最近の図画工作はなんだかわけのわからないものをつくらせている。」の意見に注目したい。時代とともに変遷していく図画工作の表現活動をどのように説明していくか指導者側の課題といえるだろう。そのためには教員が児童の発達段階に応じた授業内容と学習のねらいを明確にした上で、図画工作の役割について保護者に伝えていく機会が必要となる。たとえば、保護者会等では作品展示の他に制作過程での学びの様子を説明できる写真や映像資料の提供、また、題材の解説、授

表10 小学校で教える図画工作の授業についてあなたのお考えをお聞かせください。

	％	人数
<b>問Ⅰ. 図画工作の授業は必要か不要ですか。(どちらかに○を付けてください)</b>		
必要 (あった方がよい)	98.1%	1708
いらない (なくてもよい)	1.0%	18
無回答	0.9%	15
<b>問Ⅰ-1. 必要と答えた方にお聞かせします。その理由は以下うちどれですか。当てはまるものすべて○を付けてください。</b>		
絵の描き方や工芸の作り方が学べるので、社会に出てから趣味や職業で活かすことができる。	30.2%	516
色彩やデザインの勉強をすることで日々の生活を豊かに満ちる力が付く。	31.7%	541
ファッションや美的なセンスを鍛えることができる。	11.5%	196
芸術作品に興味を持たせ、鑑賞する楽しさを学ばせてくれる。	33.0%	563
ものを作り出す喜びを学べる。	84.0%	1434
発想力や想像力を鍛え、創造的な力を身につけられる。	75.7%	1293
日本の文化や世界の文化の理解が進む。	14.8%	253
美的な感性が育ち、心が豊かになる。	39.3%	671
図画工作を通して自分なりの考え方を発見し生き方を考えることができる。	21.3%	363
図画工作を通して自分を取り巻く身の回りの世界を把握する力が付く。	12.6%	216
子どもの興味と大人の教科を学びその中で自分の特性を探した方がよい。	58.5%	1000
手先や脳の発達のために必要である。	43.6%	744
思い思いの作品づくりを通して個性が育つ	52.1%	889
図画工作はあった方がよいと思うが、具体的な理由は見当たらない。	3.2%	54
やりたい人が取り組む選択制でよい。	1.4%	24
<b>問Ⅰ-2. いらないと答えた方にお聞かせします。その理由は以下のうちどれですか。当てはまるものすべて○をしてください。</b>		
図画工作よりも、他の教科に時間をさくべきだ。	33.3%	6
感性やセンスは図画工作に取り組まなくても身に付く。	22.2%	4
すべての人が絵や彫刻など表現力が好きではない。	61.1%	11
図画工作を学んでも、絵や彫刻が上手になるとはいえない。	33.3%	6
図画工作の必要性を感じない。	27.8%	5
図画工作を学んでも将来役に立たない。	11.1%	2
趣味的な教科は学校で行わなくてもよい。	11.1%	2
最近の図画工作は、なんだかわからないものを作らせている。	38.9%	7
はっきりとした理由が考えられないが特に図画工作は必要ないと思う。	16.7%	3
選択制にしてやりたい人が取り組めばいい。	66.7%	12

業公開では保護者参加型の授業で体験から学ぶ機会の提供などの工夫をしたい。日頃から授業の様子を児童の姿を通して保護者に伝達し、保護者の期待に応じていく必要がある。

②「小学校6年間で、図画工作の授業で必ず教えてほしいことは、どのようなことですか」について、表現する楽しさを味わわせてほしい(71.2%)。「創意工夫する能力を養ってほしい」(63.7%)。「基本的な用具や道具の使い方を教えてほしい」(60.1%)。

「絵の描き方や工作の作り方などの技術を教えてほしい。」(58.8%)の回答が上位をし

<b>問Ⅱ. 小学校6年間で、図画工作の授業で必ず教えてほしいことはどのようなことですか。必要と思われるものを以下の25項目の中から10個選び○をつけてください。(○の数は10個まで。少なくともよい。)</b>		
絵の描き方や工作の作り方などの技術を教えてほしい。	53.8%	937
色や形についての知識を教えてほしい。	38.4%	669
基本的な用具や道具の使い方を教えてほしい。	60.1%	1047
伝統的な工芸などを重視して、日本文化について教えてほしい。	19.6%	341
作品鑑賞で自国や他国の文化理解を進めてほしい。	25.8%	450
有名な絵や作者についての知識を教えてほしい。	17.7%	308
美術鑑賞の活用や楽しみ方を教えてほしい。	20.6%	359
絵の視方を教えてほしい。	13.0%	227
基本的な日本及び西洋の美術史を教えてほしい。	5.7%	99
風景などを観察して描く授業を重視してほしい。	29.7%	517
展覧会に入選する作品の作り方やテクニックを教えてほしい。	2.9%	50
写真や、ビデオ、アニメーションなどの学習をしてほしい。	7.6%	132
コンピュータグラフィックスなど現代的な学習に取り組んでほしい。	20.1%	350
デザイン感覚やセンスをのばしてほしい。	17.2%	299
様々な材料を使ったりしながら自由にあそびさせてほしい。	39.3%	684
創意工夫する能力を養ってほしい。	63.7%	1109
表現する楽しさを味わわせてほしい。	71.2%	1239
美しいものに感動する心を育ててほしい。	47.2%	822
個性の大切さに気づかせてほしい。	33.2%	578
集中力や根気を育ててほしい。	38.0%	662
将来の生活やつながるような指導をしてほしい。	3.9%	68
手先を器用にさせてほしい。	4.8%	84
試行錯誤してもものを作り出す経験を味わわせてほしい。	28.8%	502
思いのままに表すことで、心の解放をさせてほしい。	17.2%	299
ものを作り出す活動が好きになるようにさせてほしい。	27.6%	481

めた。この数字から表現活動をより楽しく学ぶために基本的な用具の使い方や、絵の描き方など技能が必要であるという考えであると同時に、親の世代が受けてきた教育の価値観を垣間見ることができる。

また、教えてほしいことを選択肢には鑑賞や文化理解、また伝達手段としてのデザインの項目もあったが、結果は20%前後で少数であった。小学校6年間ではまだこれらの項目は関心が低い。中学校、高校の美術に期待するのであろう。このアンケート項目で着目したいのは、「集中力や根気」(38.0%)「試

行錯誤してもものを作り出す経験」(28.8%)である。どの教科でも子どもの能力を高めるための重要な項目である。また「美しいものに感動する心を育ててほしい」(47.2%)「個性の大切さに気づかせてほしい」(33.2%)は上位4項目とともに、図画工作の特性として「自己存在感」や「豊かな心」の育成について保護者等が子どもの成長に「豊かな人間性」を求める願いととれる。このことを考えると、義務教育9カ年を見通して図工・美術教育では児童生徒の発達段階をふまえたカリキュラムを組み立て、心の教育の一端としても保護者の期待に添える授業展開をしておく必要がある。(宮島瑞子)

### III 学びの質を高めるために

児童の学びの質を高めるには教員の指導力向上無くしてはあり得ない。現在審議されている中央教育審議会でも指摘<sup>7)</sup>されている。そこで、今回のアンケートを元に図画工作における学びの質を高める方策を、教員の資質向上に視点をあててまとめていきたい。また、図画工作・美術の学力保障カリキュラムを生かしていく上でも実践的な提案となるようにしたい。提案は共同研究者と共に議論し見出した具体的な改善策を中心にまとめる。

#### 1 研修のあり方

##### (1) 小中連携の教員研修

教員が指導や評価に自信を取り戻すためには研修を行うことが一番の解決策である。今回のアンケートからは、日々の授業実践の不安を取り除くためには相談できる教員、専門的な知識や技法も必要に応じて教えてくれる教員の存在を望んでいる。そこで、中学校の美術科教員との連携に改善の方策を見出したい。中学校には専門的な知識や技法を身につけた教員がいる。小学校では、図画工作科を得意とする経験豊富な教員もいる。たとえば、放課後に中学校教員を招いて専門性を生かした実技研修会や作品の評価研究を行うなど、小中学校教諭の合同研修で「定期的な情報交換」「ニーズに応じた実技研修」等を各

中学校区や地区ブロック単位で実施し解決の糸口としたい。この方策は小中の課題を子どもの発達から捉えなおす相互理解の機会にもなると同時に、中学校の教員が各校1名という環境の中でお互いに情報交換をする良い機会となる。また、造形あそびについては中学校の教員の中には否定的な意見を持つ教員もあり、それは実際の活動の姿を知らない場合が多い。この小中教員の相互交流をつくるのが所沢市全体の図画工作・美術の学力を向上させていく大きな力になる。そのためには、研修時間の確保を教育委員会レベルで保障していく必要があると同時に校内研修で中学校教員を派遣してもらうような小中の協力関係を早急につくる必要がある。

##### (2) 研修内容

次に研修の内容である。研修は教員自身が参加するワークショップ形式の研修やビデオで撮影した子どもの活動する姿を分析する評価研究など、具体的な研修が必要である。様々な事例を研究して初めて一人一人にあった指導ができるようになる。アンケートで「造形あそびは自由な発想の機会・子どもはとても生き生きと自由な発想で活動するため」という教員の記述があった。そのように子どもの姿を教員がしっかり捉え、子ども自身の活動に造形美術教育の意義を見出すことができれば図画工作科の指導や評価についての理解も深まるだろう。造形あそびの研修については、現状では小学校図工主任を対象とした研修会止まりで、教員一人一人まで波及していない。造形あそびでは物理的条件を理由に取り組んでいない教員が多い中、大がかりな活動を必要としない題材開発が求められる。その際、十分に造形あそびのねらいが達成できる題材を考えなくてはならない。また、できることなら小中の教員連携の中で題材の開発をしたい。その際、活動のスタイルの追求ではなく活動自体に子どもの学びを見いだせる題材の開発及び指導のあり方の研究が求められる。

### (3) 日常の研修

子どもの作品を見合うことが先ず必要である。休み時間など、子どもの作品をどう評価するか、具体的なものを提示して議論することが重要である。つまり、評価のあり方が指導を考えることとなり、題材を児童の実態に合わせて工夫していくことにも繋がっていく。アンケートで図画工作は学級担任がよいと答えた理由に児童理解が進むと多くの教員が答えているように、図画工作の作品を通して児童理解を深める良い研修にもなる。このようなコミュニケーションの機会に溢れた職場環境の創出は教員一人一人の意識とともに管理職に求められるマネジメント能力にもなるだろう。

#### 2 所沢学力保障カリキュラムに向けて

今回の調査で明らかになったことは、図画工作科を教える教員の指導や評価等のスキルアップを図る研修環境が少ないということである。同時にこのことは各教員の教える意欲や意識の問題として、学力向上カリキュラムと並列する課題と言えよう。

アンケートを分析し議論をしていく中で常につきまとう問題は教員の勤務時間の問題であった。この時間の問題は「時間を見いだす」ことでしか現状では解決できない。要するに優先順位の問題でもある。実際に多忙の中で校務もこなす教員の意識も、自ら進んで指導に自信がない図画工作のために時間を生み出していこうという積極的な意志や行動には繋がらないだろう。しかしながら、保護者の図画工作への期待の大きさを考えると、このまま放置しておくわけにはいかない。このような実態を真摯に捉え、行政からの教員の資質向上に関わるシステム作りとともに、指導内容と指導目的を明確に示す義務教育9カ年を見通した学力保障カリキュラムの作成を急がなければならない。

(三澤一実)

- 1) 平成17年度・18年度自主研究員 鈴木勢津子, 所沢市立和田小学校(17年度) 安松小学校(18年度) 教諭・増田毅, 所沢市立東所沢小学校教諭・廣江香代子, 所沢市立清進小学校教諭・猪俣修, 所沢市立三ヶ島中学校教諭・宮島瑞子, 所沢市立向陽中学校教諭・麻生敬子, 所沢市立狭山ヶ丘中学校教諭・田中俊一, 所沢市立柳瀬中学校教諭.
- 2) 「新しい教科書活用の視点 図画工作・美術科における教科書の役割」文教大学附属教育研究所「教育研究所紀要 第11号, 三澤一実, 2002」
- 3) 小学校学習指導要領解説 図画工作編 文科省
- 4) その一つの理由は、戦後まもなく教員の有志が始めた「所沢市子ども写生大会」の存在が大きい。この写生大会は小中学校の教員が実行委員として、子どもの絵の審査や、審査のための研修会などを積み重ね、半世紀以上も各学校の図画工作教育の牽引者となってきた実績がある。
- 5) 尾木によると「現場こそ「大学院」(日常的な研修) 質の高い職員室文化の建設。相互信頼に基づく伸びやかな学び合い支え合い。開く実践スタイル」とし、教師集団で学び合う環境及びそこで生まれる学び合いの文化を職員室文化と言っている。「あるべき教師像と教員の質の向上について」－「子どもの目線」で考える－中央教育審議会義務教育特別部会(第3回議事録・配付資料[資料4] 2005年3月23日, 尾木直樹(法政大学キャリアデザイン学部教授・早稲田大学大学院客員教授)
- 6) ずがこうさく(開隆堂出版, 平成16年度)では造形あそびをアツクった題材が、低学年9題材(10ページ) 中学年6題材(9ページ) 高学年6題材(6ページ) 掲載されている。
- 7) 「教師の質の向上のためには、職場の同僚同士のチームワークを重視し、全員のレベルを向上させる視点と、個々の教師の能力を評価し、向上を図っていく視点の両方を適切に組み合わせることが重要である。その際には、校長のリーダーシップ及び学校を支える教育委員会の役割が重要である。」中央審議会、「新しい時代の義務教育を創造する」(答申) 第Ⅱ部第2章(2)ア3項、平成17年10月26日

## IV 研究の内容②

### 『つきたい力』

小学校の図画工作においては、表現及び鑑賞の内容について教科書の題材に沿って指導することにより、計画的にねらいを達成することができる。しかし、中学校の限られた美術の時間数では、教科書の題材に沿って、すべての題材を指導することは現実的ではない。よって、身につけさせたい力を明確化し、そのねらいを達成できる精選された適切な題材を、3年間を通してバランスよく指導計画に位置づける必要がある。そこで、指導要領に示された、「目標及び内容」から“つきたい力”をあらためて確認したい。

#### 1 教科の目標と解釈

##### (1) 教科の目標

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的能力を伸ばし、豊かな情操を養う。

##### (2) 私たちの解釈（所沢学力保障プラン）で育てるべき力

#### ○「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して」

解説書では

(目標) ・望ましい人間形成を果たし得るために美術の活動を表現及び鑑賞にかかわる幅の広い美的体験活動を通じて行う。

(つきたい力) ・「望ましい人間形成を果たす」と述べられている。

本研究員では、このことを

「望ましい人間形成」とは、生きる力として示された能力である。

生きる力とは

①自己と社会との相互関係

②自己と他者とのコミュニケーション

③自立（個人の自律性と主体性）

と考える。

#### ○「美術の創造活動の喜びを味わい」

(目標) ・創造活動の喜びは、表現及び鑑賞の活動を通して生徒一人ひとりが楽しく主体的、個性的に自己発揮しているときに味わうことができる。  
・美と創造という観点から追求していく美術の表現・鑑賞の全課程を通して美術の喜びを味わわせる。

(つきたい力) ・「楽しく主体的、個性的に自己発揮する」

(私たちの理解)

自分の感じ方に基づいて考えたり物を作りだすことができる。また、それを社会に働きかけたり他者に伝えることができ、自分自身への自己形成に関わることができる喜びを感じる。



○「美術を愛好する心情を育てる」

- (目標) ・「愛好する」とは生き方や心の在りように深くかかわっており、表現や鑑賞の行為自体が能動的に行われなければならない。
- ・美術を愛好する心情は、生涯を通して生活の中で身に付いたよさや美しさを求める心と行為であるから、美術の学習すべての過程で培っていく。

(つきたい力) ・「表現や鑑賞の行為を能動的に行う」

(私たちの理解)

創造の喜びをもてる人は美術を愛好することができる。

○「感性を豊かにし」

- (目標) ・表現や鑑賞の活動を通して、視覚、触覚などを働かせて心で観ること体験を積み重ねることが感性を豊かにする。

(つきたい力) ・「感性とは・・・様々な対象・事象からよさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る能力」

(私たちの理解)

感性＝直観・洞察・センスなど、感じる力

創作や鑑賞など、体験を通して個人の感じ方を認め、創造の喜びにもつながっていくもの。

自己評価・他者評価といった評価活動の積み重ねによって豊かになっていくもの。

○「美術の基礎的能力を伸ばし」

- (目標) ・厳選されたそれぞれの指導事項について適切な指導をするとともに、それらが一人一人にどのように身に付いているのかということに対する見届けと指導の改善工夫にも一層意を用いる。

・基礎的能力をいっそう伸ばし個性を生かして創造的な活動ができるようにする。

(つきたい力) ・「創造的な活動」

(私たちの理解)

色や形・表現技法などの知識・理解とそれを活用する能力。

素材を元に発想したり表現する能力。

○「豊かな情操を養う」

- (目標) ・創造的な体験の中で感性や美的感覚・創造的な技能を発達させ、美意識を高め、自己の表現世界として意味付けをし、自らの夢や可能性の世界を広げていくことから、豊かな情操を養う。

(つきたい力) ・「情操とは・・・美しいものやよりよいものに憧れ、それを求め続けようとする豊かな心の働き」

(私たちの理解)

生きる力で示された能力を発揮し、よりよく生きようとする。

## 2 つけたい力と題材

- ・学習指導要領の解釈をもとに教科目標を分析し、キーワードを設定した。
- ・キーワードを「つけたい力」と考え、題材の中で育てるべき力を引き出した。領域を貫く指導内容を1学年、2・3学年に分けてあげてみた。所沢学力保障プランでは一つがキーワードと領域を貫く指導内容とを相関させて学習内容を設定する。
- ・各学年一題材で例示してみた。次年度は3年間の指導計画に広げていきたい。

### 美術で「つけたい力」と題材との関係

		第1学年	第2・3学年
目 標	目標解釈の キーワード	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教えること</li> <li>・体験的内容をバランス良く配置する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感じ方・思いを効果的に表現</li> </ul>
題 材 名		<ul style="list-style-type: none"> <li>・私を一文字にすると (文字のデザイン)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>空想に遊ぶ私 (絵画・鑑賞)</li> </ul>
表現及び鑑賞の幅広い活動を通して	望ましい 人間形成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現方法を学ぶ。</li> <li>・自分を知ってもらう。</li> <li>・自分自身に気づく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作家作品等から感じる価値観の広がりを学ぶ。</li> <li>・コミュニケーション。</li> <li>・自分の内面世界を豊かにしていく。</li> </ul>
美術の創造活動の喜びを味わい 美術を愛好する心情を育てる	自己発揮	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分らしさを出す。</li> <li>・効果的な作品を作る中での達成感を味わう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会や環境への視野を広げる。</li> <li>・多様な個性や表現を受容する。</li> <li>・自己深化による表現の広がりを感じる。</li> </ul>
感性を豊かにし	感受体験 (自己評価) (自己確認)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体験を通して自分自身の感じ方を認める。</li> <li>・相互評価を積み重ねる。</li> <li>・自己肯定感を得、自立につなげていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多くの作品にふれあう。</li> <li>・友だちの作品を見ることによって身近な他者認識を行う。</li> <li>・自分の内的世界を知る。</li> </ul>
美術の基礎能力を伸ばし	知識・理解の活用 表現の拡充	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現技法の理解と活用。</li> <li>・他者と伝え合う方法を獲得する。</li> <li>・自分らしい発想をしたり表現をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎的技法の組み合わせや発展による表現の広がりを得る。</li> <li>・新しい発見で自己内面の広がりを得る。</li> </ul>
豊かな情操を養う	よりよく生きる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生きる力で示された能力を発揮し、よりよく生きようとする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生きる力で示された能力を発揮し、よりよく生きようとする。</li> </ul>



## V 研究のまとめと今後の課題

「学力保障の観点で題材を設定する」という研究で小学校のカリキュラムと中学校のカリキュラムの関連を考えてきた。その中で小学校での造形体験や表現活動が、中学校によりよく引き継がなければ9年間の図工・美術教育の中でつけさせたい力が十分に身につかない。例えば小学校での造形遊びの体験は、中学校での幅広い表現活動に結びついている。中学校の現状ではその認識が薄く、積み重ねが活かされていない。しかし、「つけたい力」でもう一度捉え直すと、造形遊び・豊かな造形体験の大切さが明確になってくる。

中学校でのカリキュラム作成観点で、指導要領の教科の目標を分析し、3領域を貫く共通した指導内容を考えることによって、題材のとらえ方が変わってきた。いわゆる技能重視といわれる中学校美術科の指導が、人間形成や社会に生きる個人を確立していく重要な教科と位置づけることが出来た。

今日の学力観は生きる力として示されているが、OECD※1のPISA調査※2の概念枠組みの基本となっているキー・コンピテンシー（主要能力）と同一であると示されている。

3つのキー・コンピテンシー、

- ①社会的・文化的・技術的ツールを相互作用的に活用する能力（個人と社会との相互関係）
- ②多様な社会グループにおける人間関係形成能力（自己と他者との相互関係）
- ③自律的に行動する能力（個人の自律性と主体性）

の観点から今日の美術の学習を捉え直してみた。この3つのコンピテンシーをいかに授業で身につけさせるかと言うことが、学力保障につながると考えた。

保護者のアンケートから見ると、個人の資質に関する期待が大きく、社会的なスキルについての要求は図画工作・美術科においては求められていない。このことは、今までの私達の指導姿勢にも大きく関わることである。

今日の求められる学力から考え、所沢学力保障プランを作成するに当たり、社会のなかで必要とされる能力を図画工作・美術科の指導にどのように位置づけるかが今後の課題である。来年度はもう一度小学校とのカリキュラムに「つけたい力」を明確に位置づけると共に、中学校での3年間の指導計画を作成していく。

※1 OECD : 経済協力開発機構

※2 PISA 調査 : 国際学力調査